

1910年代後半から20年代までのいわゆる五・四新文化運動期は、近代中国文学の成長期にあたる。この五・四時期には全国各地に100余りの文学結社が成立しており、その中でも著名な文学者が集結し有力メディアと結びつきながらサロンとしての個性を持ち続けた結社の一つが新月社であった。

新月社の中心は詩人の徐志摩(シュイ・チーモー、じよしま、1897~1931)で、1917年北京大學入学後、18年から22年にかけて米英に留学し、コロンビア大学・ケンブリッジ大学等で学ぶいっぽう、ロンドンではバートランド・ラッセルやブルームズベリー・グループのサロンに出入りし、K・マンズフィールドらと交際している。

当時のロンドン・サロンは第一次世界大戦後の混乱の中で、既成道徳の打破、自由と進歩への信念、美への専心を掲げた知的エリート集団であった。徐志摩は22年に帰国し、北京大學などで英文学を教えるかたわら24年6月にロンドン・サロンにならって、月一、二回の晩餐会を中心とした新月社を北京に設立、これを二年ほど維持したのである。同社には胡適、陳源、女性作家の凌叔華らが集まり、同社系の『現代評論』(1924年12月~28年12月)、『新月』(1928年3月~30年6月)などの雑誌には、聞一多、梁実秋、沈從文らも参加している。

新月社のメンバーは多くが上流階級出身者で欧米留学帰り、政治的にはリベラルであるいっぽう研究系の領袖梁啓超との関係が深く政財界に通じていた。彼らは愛・自由・美を標榜して、離婚再婚、不倫、三角関係など、ロンドン・サロンから同性愛以外の奔放なあらゆる愛情関係を移入して、実際に繰り広げてみせた。とりわけ彼らがサロンを舞台に実践した未婚男女の社交と自由恋愛、結婚後の核家族の形成、既婚男女の社交は、中国にあっては空前の現象であった。

本論は徐志摩を中心とする新月社をJ・ハーバマスによる文芸的公共圏理論の枠組みを応用しつつ、その形成過程から解体までの文学史のおよび社会史的意義を解明したものである。第一章では中国における交通通信出版業の発達と近代的学制制度の導入による新興知識階級、特に女性知識人層の形成を論じ、第二章では徐志摩の米英留学体験を考察し、第三章では新月社の成立とインド詩人タゴール訪中歓迎や雑誌刊行などその社会的活動、および北京女子師範大学学園紛争をめぐる魯迅らとの論争等を分析し、第四章では新月社における恋愛という制度の展開とマンズフィールドの受容および徐志摩・凌叔華らの創作活動等を論じている。

本論文の主な成果は次の通りである。

(1) 日中英米における研究成果を踏まえて、新月社の歴史的展開とその意義を比較文学および社会史的に考察し、同社に新しい文化史的位置づけを与えた。

(2) 北京女師大論争を文芸的公共圏の視点から再検討することにより、この論争に清末1900年代の吳稚暉vs章炳麟論争のそれぞれ門下生による継続的論争という側面がある点を浮き彫りにした。

(3) マンズフィールドが中国において受容されていく過程をより明確にし、特にその凌叔華文学への影響を詳細に解明しつつ、それが新月社においては恋愛・創作のためのモデルであったことを論証した。

(4) 新月社がそのサロンの性格により日記書簡体文学形式をいち早く試み、それが中国でブームを呼び起こした点、そのブームとは国民革命後の知識人の反省の記録として解釈できる点を指摘した。

本論文は米英大学等における公文書調査までは試みておらず、徐志摩留学体験に関しては新材料に乏しい。またハーバマスの公共圏理論の適用において、欧米と中国との社会的基礎の差に関し十分な考慮を払っていない。新月社が示したマンズフィールド心理小説への関心についても、さらに掘り下げて論じることが可能であったろう。これらは今後の課題といえよう。だが上記(1)~(4)を中心に顕著な成果をあげており、その内容は博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。